アレクサンドル・カバネル《狩りの女神ディアナ》における折衷主義的表現について

山内 涼太郎 （東北大学）

19 世紀フランスの画家アレクサンドル・カバネルによる《狩りの女神ディアナ》(1882 年、栃木県立美術館所蔵)は、アカデミーで好まれた滑らかな新古典主義的タッチによる女性の半裸体と粗いタッチで事物の輪郭をぼかす、バルビゾン派から印象主義へと至る新しい絵画の流れを想起させるタッチによる背景を組み合わせた作品である。この特質はカバネルの画業でも珍しい例であるが、これまでの研究史、例えば 2010 年モンペリエで開催された大回顧展でも、視覚的ソースおよび意図については特に論じられていない。本発表では、この作品の人物像および背景の視覚的ソースを探究することで画家の狙いの一端を明らかにしながら、本作をカバネルによる積極的な折衷主義的試みとして評価したい。

本作品における女神ディアナは、木にもたれかかってくつろぎ、頭を左手で支え、遠くを見ている。このような立像と座像の中間にあるような姿勢は、18 世紀のアカデミー画家たちが描いた休息のディアナに基づいている。とくに、ルイ・ド・ブローニュー《休息のディアナ》(1707 年)における片肘をついて腰かけ、もう一方の手で弓を持つポーズは、カバネルのディアナと共通している。カバネルは前世紀のアカデミー画家の試みへと遡ることで、自らもまた伝統のもとにあると誇示したと考えられる。

しかし、背景描写では、カバネルが描く木々の葉や円形の山などの描写は明らかに粗雑であり、画家はアカデミスムの様式からの距離をアピールしている。このようなタッチは未完成であることを示すのではないかとも考えられるが、《エコー》(1874 年)でもカバネルはこうした粗いタッチの背景を示しており、ディアナの背景も意図的であろうと推測される。そうだとすれば、本作品の背景は細やかでなめらかな新古典主義的タッチと意図的に対置されたものであり、ぼんやりした背景の中にクリアな人物像が浮かびあがらせる効果を狙ったと仮定できる。このような表現を画家に促した源泉としては、1880 年のサロンで評価されたギュスターヴ・モロー《ガラティア》が考えられる。カバネルは話題を呼んだ近い時代の作品から構図や様式を借用することがあった。両作品では全体的構図、女性像の姿勢、人物像と背景の色彩の対置が共通している。一方で、背景のタッチではカバネルの方がより大胆になっている。カバネルのカタログ・レゾネにおいてジャン・ヌガレは、「《狩りの女神ディアナ》がルノワール《ディアナ》(1867 年)と最も親和性があるのは不思議なことである。」と述べているが、このような違和感は単なる偶然というより、カバネルが意図した積極的な折衷主義と解釈できる。

以上の検討から、栃木の作品において画家は、自らがアカデミーの伝統に属しながら新しい絵画運動にも同化できるという折衷主義を積極的かつ肯定的に提示する挑戦をしていると考えられる。